

2024年度

徳島大学全学FD推進プログラムの実施報告

徳島大学高等教育研究センター
教育改革推進部門

実施報告

2024 年度徳島大学全学 FD 推進プログラムの実施報告

南川慶二¹⁾・吉田 博²⁾・塩川奈々美²⁾・飯尾 健²⁾¹⁾ 徳島大学教養教育院 ²⁾ 徳島大学高等教育研究センター

要約：徳島大学では、2002 年度から全学 FD 推進プログラムを通じて、FD の体系化、組織化、日常化を推進してきた。2024 年度は、「授業設計ワークショップ」などのワークショップ型のプログラムを対面で実施し、参加者同士の情報交換の機会を提供することができた。オンラインツールを活用した双方向 FD「授業について考えるランチセミナー」では、高知大学と香川大学による協働で FD プログラムの開発・運営を行った。「大学教育カンファレンス in 徳島」は昨年度に引き続き対面会場での実施をメインとし、一部のプログラムをオンラインで配信するハイブリッド型で開催したことで、参加者同士の情報交換の機会を作ることができた上に、学外からの参加も多数あり、多様な参加ニーズに応えることができた。本年度実施した各プログラムの概要を記載し、アンケート結果等から窺える成果と今後の課題について考察する。

(キーワード:教育の質保証, 教育力開発コース, 授業について考えるランチセミナー, オンライン研修)

2024 Annual Report on Faculty Development Programs at Tokushima University

Keiji MINAGAWA¹⁾ Hiroshi YOSHIDA²⁾ Nanami SHIOKAWA²⁾ Ken IIO²⁾¹⁾ Institute of Liberal Arts and Sciences, Tokushima University²⁾ Research Center for Higher Education, Tokushima University

Abstract: Tokushima University has been promoting the systematization, organization, and routinization of faculty development (FD) through the university-wide FD promotion program since academic year 2002. In academic year 2024, workshop-style programs such as "Class Design Workshop" were held face-to-face. This enabled us to provide an opportunity for participants to exchange information with each other. In addition, the series of online interactive FD seminars, Lunch Seminar on Thinking about Classes, was collaboratively developed and managed in partnership with Kochi University and Kagawa University. Moreover, following the preceding year's example, "the University Education Conference" was held face-to-face, and some programs were delivered online, so we could create opportunities for participants to exchange information with each other. It is noteworthy that there were many participants from outside the university, and we were able to meet their diverse needs. An overview of each program conducted this year and discussions about future challenges based on the results of the questionnaire are described.

(Keywords: quality of education, Educational Development Course, Lunch Seminar on Thinking about Classes, online training)

1. はじめに

コロナ禍を経て大学の教育環境は大きく変化し、コンテンツのデジタル化やオンライン授業が日常的なものになった。対面授業が復活した現在、新旧の方法を選択あるいは併用することも可能になり、多様化が進んでいる。その一方で、学生の学びに対する姿勢も変化してきている。対面授業では一方的な講義よりもグループでの話し合いなどを取り入れた授業が好まれる傾向にあり、極端

な意見としては対面授業の必要性を疑問視する声さえ散見されるようになった。

教員は分野の特性あるいは目的や難易度等に応じて授業の実施方法を選択し、工夫を凝らして教育を実践している。これらの情報を共有して大学教育の改善につなげるために、FD の重要性はますます高まっている。

教育の現場のみならず FD も対面とオンラインを適宜使い分ける体制が整いつつある。大学間の

情報交換や交流が促進される効果もあり、FD 活動の幅が広がり多くの成果が得られている。

以下、今年度の各 FD の具体的内容とその成果を述べる。(南川慶二)

2. 教育改革に関する勉強会・意見交換

徳島大学の教育改革を遂行するために、徳島大学教育担当理事と全学 FD 推進プログラムの実施を支援する高等教育研究センター教育改革推進部門は、大学教育改革の動向及び徳島大学の現状について、意見交換を行い、具体的な教育改革の取り組みについて提案・検討を行っている。本 FD はマクロレベルの FD (教育改革 FD) として位置づけており、教学マネジメントを支える基盤としての役割も期待されている。2024 年度は、2025 年度に本学が実施予定の期間別認証評価に向けた対応、2025 年度に本学が開催校として担当する「SPOD フォーラム 2025」のプログラム、近年活動が停滞していた「教育について考え提案する学生・教職員専門委員会」、指導補助者の制度や研修などに関する意見交換を行った (表 1)。

教育改革 FD を通して、教育改革推進部門では、高等教育開発の専門的立場から、本学が取り組むべき教育改革を支援するとともに、教育の内部質保証を推進している。近年の大学教育においては、教学マネジメントの確立が強く求められており、教学 IR を機能させるための取り組みも必要であり、2025 年 7 月には、高等教育研究センターの改組も予定されている。

表 1 教育改革に関する勉強会・意見交換

| 回 | 実施日 | 主な内容 |
|---|-----------|-----------------------------|
| 1 | 4 月 25 日 | 教育について考え提案する学生・教職員専門委員会 |
| 2 | 6 月 6 日 | 教育力開発コース SPOD フォーラム 2025 |
| 3 | 8 月 20 日 | 授業設計ワークショップ |
| 4 | 11 月 21 日 | シラバス作成ガイドラインの改訂 |
| 5 | 1 月 27 日 | 徳島大学の教学 IR |
| 6 | 2 月 19 日 | 指導補助者研修及び制度 |

場所：教育担当理事室 (本部棟 3 階) 等

引き続き全学 FD 推進プログラムは本学の教育改革、教育の内部質保証に関わる取り組みを通じて、学習者本位の大学教育を実現することに貢献することが期待されている。(吉田 博)

3. 教育の質保証 FD

3.1 目的・背景

徳島大学では 2018 年度に「徳島大学における教育の内部質保証に関する方針」等が定められ、学部等ごとに「教育プログラム評価委員会」が設置された。各教育プログラム評価委員会では、「プログラム評価・改善実施手順」を定め、教育プログラムの評価・改善を進める上での体制整備が行われた。2020 年 1 月 22 日に中央教育審議会大学分科会より示された「教学マネジメント指針」においても、教育プログラム評価・改善をエビデンスに基づき、実質的に実施していくことが強く求められており、徳島大学でも実態を把握し、全学的な支援及び情報提供、組織間の連携等を進めることが必要であるといえる。2020 年度には、各学部等のプログラム評価委員会を対象に、教育プログラムの評価・改善に関する課題やニーズを把握するための調査を実施した。その結果、プログラム評価の意義や必要性に関する理解を共有すること、技能領域や態度領域も含めて客観的に評価するための具体的な方法とエビデンスを整理することが、多くの学部学科等で必要であることが明らかになった。

これらの背景のもと、各学部等の教育プログラムの評価・改善について、客観的な指標に基づいた透明性のある評価、改善の計画を作成することを目的とした教育の質保証 FD を計画した。2024 年度は、2021 年度より継続的に実施している歯学部において、担当者と打ち合わせを行い、学生の意見を学部教育に反映するためのワークショップを実施した。

3.2 概要

教育の質保証 FD の具体的な内容は、高等教育研究センター教育改革推進部門教員と学部等の教育プログラム評価に関わる担当者が、プログラム評価の取り組みを確認し、当該学部等が目指す取

り組みの実現に向けて課題や対応策等を検討する。打ち合わせを重ねながら、部門スタッフが必要な情報を提供し、当該学部等の文脈に合わせた実現可能な評価・改善計画を作成するものである。

3.2.1 歯学部

■打ち合わせ

2024 年 5 月 28 日 (火)

■会場

歯学部第 1 会議室

■参加者

日野出大輔, 岩崎智恵, 数藤愛子

■概要

歯学部では 2021 年度から本 FD の取り組みとして、教育プログラムの評価改善に取り組んでいる。2021 年度は、教育プログラム評価を行う上で重要な指標の 1 つとなる学生の学習成果を可視化・測定するためのアセスメント計画「カリキュラムアセスメントチェックリスト (以下, CACL)」の作成を行った。2022 年度は、作成した CACL の問題点等を検討し、学生の学習到達度を測定するための評価基準と評価資料を具体的にした「マイルストーンルーブリック」を作成した。2023 年度は、作成した「マイルストーンルーブリック」や CACL を活用して、実際にいくつかの到達目標に対して評価を行っている。2024 年度は、教育プログラムの改善につなげるために、学生視点からの意見を取り入れるために、学生と教員がグループで意見交換を行い、学生は将来を見据えて学習していくための意義や取り組み方を考え、教員は学生のニーズに合わせた、より効果的な教育

活動や授業実践の在り方を考えるためのワークショップを実施した (図 1)。

ワークショップは、2024 年 7 月 22 日 (月) に歯学部講堂にて実施し、歯学部の教務委員会委員、プログラム評価委員会委員、FD 委員会委員及び参加希望教員合わせて 26 名に加え、19 名の学生も参加した。はじめに、歯学部教務委員長工藤保誠教授より、CBT 試験や国家試験の現状と課題について報告があり、続いて各学年の総代を通じて事前に集約した学生の意見について、教育改革推進部門より、重要なポイントを整理しながら紹介した。その後、学生と教員の混成のグループに分かれ、次の 2 つの論点について、グループで意見交換を行い、最後に全体共有を行った。

論点 1: 歯学部の専門科目において、これまで受講した授業の中で、学修を促すという観点でよかったと思う授業や取り組み

論点 2: 国家試験, CBT 試験を見据えて、学生が主体的に学修に取り組むために、必要な支援や教育

3.3 成果と課題

2021 年度からの取り組みを継続し、教務委員会委員やプログラム評価委員会委員などの教員とともに、教育プログラムの改善に資する取組を行うことができた。今回のワークショップでは学生にも参加してもらい学生視点からの意見をもとにして教員と学生が意見交換を通して、よりよい教育の実現に向けて課題や今後の取組について共有することができた。



図 1 ワークショップの様子

論点 1 については、「①実習やアクティブラーニングの実施」、「②資料や動画教材の工夫」、「③小テストや学生との質疑応答の実施」が複数のグループで挙げられた。①については、学生の動機づけに有効であり、特に 1 年次などの早い段階で実施することに意義があることが分かる。また、学生自身の技能や理解度を把握する機会にもなり、主体的な学修につながる事が分かる。②については、理解の促進に有効的であることが分かる。動画教材は、学生が好きなタイミングで自主的に学習することができ、映像コンテンツに慣れた現代の学生には適していると考えられる。③については、学生に知識の確認や振り返りを促すことになり、日々の学習につなげることができる。

論点 2 については、「①試験対策・動機づけ」、「②資料や授業の工夫」が挙げられた。①については、すでに説明会や対策のための勉強会を実施していると考えられるが、1, 2 年次などの早い段階から興味を持つ学生もおり、将来を見据えた動機づけのためにも低学年も参加できるようにすることも有益である。また、国家試験を終えた現役の先輩の話聞く機会や、交流する機会があることで、学生にとってより身近で信頼できる存在から、具体的な対策が聞けることで、試験への動機づけだけでなく、精神面での支えになる可能性もある。②については、論点 1 と重複する部分もあるが、一方的に教員の話聞くだけでなく、プレゼンテーションやディスカッションを取り入れた双方向的な授業を展開することが求められていると言える。

最後に、今回、歯学部において多くの関係者が関わり、ワークショップを実施することができた理由には、歯学部の担当者である日野出教授、岩崎教授、運営の支援をしてくれた歯学部学務系の職員の尽力が不可欠であったといえる。2025 年度も、引き続き今回のワークショップで明らかになった課題や、挙げられた意見をもとにして、授業や教育プログラムの改善につなげていく予定である。

(吉田 博)

4. 教育力開発コース

教育力開発コースは、授業設計、授業の実施・改善、教育活動を振り返り、自身の目標を明確にし、改善につなげるといった一連のプロセスを支援するものである。徳島大学においてはこれらの教育活動を重視しており、学外より講師または准教授採用後 1 年以内の教員、及び、学内で助教から講師または准教授昇任後 1 年以内の教員を対象に実施している。対象者はまずステップ 1「授業設計ワークショップ」を受講した後、ステップ 2「授業実践の振り返り」または「授業参観・授業研究会」のいずれかを受講することが定められている。加えて受講後 3 年以内に、ステップ 3 である「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」を受講することが望ましいとしている。

4.1 授業設計ワークショップ

4.1.1 目的

授業設計ワークショップは、授業設計とアクティブラーニングの手法について学び、模擬授業・授業検討会を行うことで、実践的に知識やスキルを修得するものである。本ワークショップの目標は次の 4 つである。

- ① FD 活動の理念、活動計画を理解することができる。
- ② 授業を計画、実施し、評価する方法を体得することができる。
- ③ 授業研究の仕方を理解し、実践することができる。
- ④ FD 参加者同士の仲間づくりができる。

また 2017 年度からは参加者がワークショップの講義部分をビデオ教材で事前に学習してからワークショップに参加する、反転授業形式を導入している。

4.1.2 概要

■開催日程

2024 年 8 月 22 日 (木)・23 日 (金)

■会場

常三島キャンパス フューチャーセンター (地域創生・国際交流会館 5 階)・教養教育 4 号館

■対象者

本ワークショップは四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD) へ開放しており、2019 年度以来、学外の参加者の参加を認めている。今年度は SPOD 加盟校から 3 名が参加した。学内の対象者は今年度に教育力開発コースの受講対象者となった教員、および昨年度までに本ワークショップを修了していない教員、推薦を受けた者 (助教及び、教授等) としている。ただし、病院及び、プロジェクト採用等の場合は除いた。また、①学外で同様の研修を受けた場合、②担当する授業がない場合、③診療業務を主に担当している場合、についても参加を免除した。

■参加者

2024 年度の参加者は徳島大学所属の教員 18 名と SPOD 加盟校所属の教員 3 名、合計 21 名である。詳細は以下に示す通りである。

【学内教員】

| 氏 名 | 所 属 | 職 名 |
|-------|------------|-----|
| 榎本 拓哉 | 総合科学部 | 准教授 |
| 夏目 宗幸 | 総合科学部 | 准教授 |
| 紺田 俊 | 総合科学部 | 講 師 |
| 石原 由貴 | 総合科学部 | 講 師 |
| 松井 尚子 | 医学部 | 准教授 |
| 鎌田 正紀 | 医学部 | 講 師 |
| 成澤 裕子 | 医学部 | 講 師 |
| 村上 明一 | 歯学部 | 准教授 |
| 細川 育子 | 歯学部 | 講 師 |
| 宮谷 和堯 | 理工学部 | 准教授 |
| 兵頭 知 | 理工学部 | 准教授 |
| 鶴見 裕之 | 理工学部 | 講 師 |
| 安本 真士 | 理工学部 | 講 師 |
| 森山 仁志 | 理工学部 | 講 師 |
| 松田 春菜 | 生物資源産業学部 | 講 師 |
| 藤原由紀子 | 高等教育研究センター | 准教授 |
| 山中 亮一 | 環境防災研究センター | 准教授 |
| 湯浅 恭史 | 環境防災研究センター | 講 師 |

【学外教員】

| 氏 名 | 所 属 | 職 名 |
|-------|--------|-----|
| 上萩 琴美 | 徳島文理大学 | 准教授 |
| 内倉 崇 | 松山大学 | 講 師 |
| 岡村 伊織 | 愛媛大学 | 助 教 |

■運営メンバー

運営メンバーは、理事 (教育担当)、FD 委員会委員長、FD 委員会委員を含めた教員 13 名、学務部教育支援課教育支援係職員 5 名の計 18 名であり、詳細は次の通りである。

| 氏 名 | 所 属 | 職 名 |
|-------|------------|-------|
| 河野 文昭 | | 副学長 |
| 南川 慶二 | 教養教育院 | 副理事 |
| 齊藤 隆仁 | 教養教育院 | 教 授 |
| 豊田 哲也 | 総合科学部 | 教 授 |
| 赤川 貢 | 医学部 | 教 授 |
| 西田 憲生 | 医学部 | 准教授 |
| 山下 理子 | 医学部 | 准教授 |
| 日野出大輔 | 歯学部 | 教 授 |
| 立川 正憲 | 薬学部 | 教 授 |
| 松本 健志 | 理工学部 | 教 授 |
| 櫻谷 英治 | 生物資源産業学部 | 教 授 |
| 吉田 博 | 高等教育研究センター | 准教授 |
| 飯尾 健 | 高等教育研究センター | 助 教 |
| 塩川奈々美 | 高等教育研究センター | 助 教 |
| 瀬尾亜希子 | 教育支援課教育企画係 | 係 長 |
| 天羽 萌 | 教育支援課教育企画係 | 事務補佐員 |
| 山崎 一恵 | 教育支援課教育企画係 | 事務補佐員 |

■内容

2 日間にわたり、表 2 の通りプログラムを実施した。今年度は昨年度に引き続き、全てのプログラムを対面形式で実施した。

■全体の流れ

[1 日目]

「(1) オリエンテーション」では、大学教育改革の流れや、本学の教育改革について説明を行った。とくにアフターコロナの授業を見据え、オン

表 2 授業設計ワークショップ

授業設計ワークショップ日程 (第 1 日目)

日時：2024 年 8 月 22 日 (木)

場所：常三島キャンパス 地域創生国際交流会館 フューチャーセンター

| 時 刻 | 内 容 | 講師・担当者 | 備 考 |
|---------------|---|--|----------------|
| 12:30 - 12:50 | ・受付 (地域創生国際交流会館フューチャーセンター) | | |
| 12:50 - 13:20 | (1) オリエンテーション ・はじめに (副学長より挨拶) ・大学教育改革の流れ ・研修のねらいと意義 | 吉田 博 (進行) 副学長 (教育担当) 河野 文昭 FD 委員会委員長 南川 慶二 | フューチャー センター |
| 13:20 - 13:50 | (2) アイスブレイク「課題・目標設定」 ・参加者自己紹介・交流 | 塩川奈々美 | フューチャー センター |
| 13:50 - 14:00 | 休憩 | | |
| 14:00 - 15:00 | (3) ワーク「自身の教育理念」 ・授業で大切にしていること ・育成したい学生像 ・実践したい教育 | 吉田 博 | フューチャー センター |
| 15:00 - 15:10 | 休憩 | | |
| 15:10 - 16:40 | (4) ワーク「授業設計の基本」 ・アクティブ・ラーニングの理論と効果 ・成績評価の意義・方法 ・学生の学習を促す授業方法 | 飯尾 健 | フューチャー センター |
| 16:40 - 16:50 | 休憩 | | |
| 16:50 - 17:30 | (5) 講義・ワーク「授業計画」 ・シラバス・授業計画書の書き方 ・シラバス・授業計画書の修正 ・2 日目の模擬授業の進め方について | 塩川奈々美 スタッフ全員 | フューチャー センター |
| 17:30 - 18:00 | シラバス・授業計画書の修正および スタッフへの質問・個別対応 (任意参加) | スタッフ全員 | フューチャー センター |

授業設計ワークショップ日程 (第 2 日目)

日時：2024 年 8 月 23 日 (金)

場所：常三島キャンパス 教養教育 4 号館 201 教室他

| 時 刻 | 内 容 | 講師・担当者 | 備 考 |
|---------------|--|---|----------------------------------|
| 12:30 - 13:00 | ・集合, 模擬授業準備 | スタッフ | 集合：教養教育 4 号館 4-201 教室 |
| 13:00 - 15:30 | (6) 模擬授業実施 (グループで実施) ・FD 委員紹介, 流れの確認 【模擬授業の流れ】(1 人 30 分×4 人 (休憩適宜)) ・シラバス・授業計画書の紹介 (5 分) ・模擬授業の実施 (15 分) ・授業検討会 (10 分) →チェックリストをもとによかった点, 改善点等を 検討する。 | 各班司会： FD 委員 ワーク支援： スタッフ全員 | ＜模擬授業実施手順＞ 教室：各班グループ部 屋へ移動 |
| 15:30 - 15:45 | 休憩 | | |
| 15:45 - 16:45 | (7) 模擬授業の振り返り ・模擬授業検討会を受けて授業の改善点 ・今後のアクションプラン | 吉田 博 | 教養教育 4 号館 4-201 教室 |
| 16:45 - 17:00 | (8) 教育力開発コース概要 ・教育力開発コースの意義・内容 | 飯尾 健 | 教養教育 4 号館 4-201 教室 |
| 17:00 - 17:15 | (9) プログラムのまとめ ・講評 ・修了証書授与 ・アンケート ・おわりの言葉 | 吉田 博 (進行) 副学長 (教育担当) 河野 文昭 FD 委員会副委員長 豊田 哲也 | 教養教育 4 号館 4-202 教室 |
| 18:00 - | 情報交換会 (任意参加) | | |

ライン授業で培ったノウハウをどう対面授業に活かすか、も交えて授業設計について気を付けるべき点を紹介した。

続いて、授業設計ワークショップ全体の流れや教育力開発コースの意図や内容を説明し、昨年度の参加者の声を紹介して、参加者の動機づけを行った。

「(2) アイスブレイク」では、参加者同士がお互いについて知ることができるよう、テーマにもとづいた自己紹介を行うというワークを実施した。

「(3) ワーク 自身の教育理念」では、教育活動を行う上で、それぞれの教員が大切にしていることを整理しながら、教育理念を意識することの大切さを説明し、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ」の紹介ならびに教育理念を整理するためのミニワークを行った。

「(4) ワーク 授業設計の基本」では、事前にビデオ教材による講義を視聴した上で参加する反転授業形式で実施した。今年度は教育改革推進部門のホームページで講義ビデオを授業設計における重要事項に焦点を当てたものに改訂した。

ワークではこれらの動画を踏まえ、参加者が作成した参加者があらかじめ作成したシラバス、授業計画書について修正し、その内容を共有した。

「(5) 講義・ワーク 授業計画」では、シラバスや授業計画書の書き方について説明があり、徳島大学が定める「シラバス作成ガイドライン」が紹介され、目標設定の仕方や、その記述方法が解説された。続いて、これまでの講義やワークを踏まえて、その後、参加者がペアとなりシラバスおよび授業計画書の相互チェックを行った。

[2 日目]

「(6) 模擬授業実施 (グループで実施)」では、参加者や運営メンバーがグループごとに各教室に分かれて、参加者全員が模擬授業を実施した。各グループには FD 委員、高等教育研究センターの教員がコンサルタントおよび司会者として入り支援を行った。模擬授業の流れは、はじめに参加者が模擬授業を実施する授業のシラバスと授業計画書を説明し、その中からある一部分の 15 分間を切り取り、その部分を模擬授業として実施した。グループの参加者は学生役として模擬授業に参加

した後、全員で授業検討会を行い、参加者がお互いに良い点、改善点について話し合いながら、授業を良くするための方策などについて議論した。

「(7) 模擬授業の振り返り」では、模擬授業に対する全体的なコメントがあり、その後参加者は自身の模擬授業を省察し、グループのメンバーからももらった意見をワークシートにまとめ、今後のアクションプランを作成した。その後、グループ内で共有を行った。最後に、数名の参加者から、研修で学んだことやアクションプランを紹介してもらい、全体での共有を行った。

「(8) 教育力開発コース概要」では、《授業設計ワークショップ》⇒《授業実践の振り返り》or《授業参観・授業研究会》⇒《ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ》と続く「教育力開発コース」の概要や意義が説明された。

「(9) プログラムのまとめ」では、ワークショップ全体に対する講評があり、終わりの言葉によって締めくくられた。修了証書は参加者に当日授与した。

4.1.3 アンケート結果

ワークショップ終了後に参加者 21 名を対象にアンケートを実施し、参加者全員から回答を得た。図 2 にアンケート結果の一部を示している。また、自由記述の代表的な回答は以下の通りである。

(1) 現在のあなたにとってレベルアップが必要なスキル・知識は何ですか。

- ・アクティブラーニング関連のスキル
- ・学生に学習を促す方法
- ・授業内容の取捨選択
- ・授業を設計する能力
- ・要点を適切に伝える能力
- ・専門的な知識

(2) 参加して良かったと思われる点を、具体的にお書きください。

- ・授業設計に関する基礎知識を得られた
- ・授業計画の方法について学ぶことができた
- ・他の教員との交流ができた
- ・自分の授業に対するコメントがもらえた
- ・自分の授業を客観的に見直すことができた
- ・自身の教育理念を考え直す機会となった
- ・授業に対するモチベーションが上がった

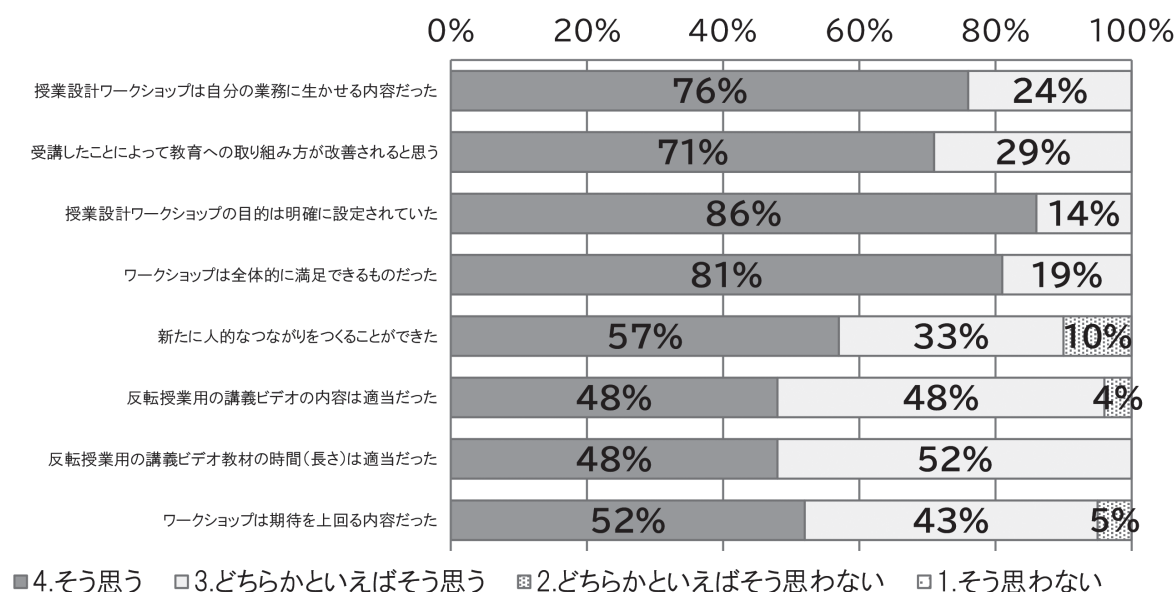


図 2 授業設計ワークショップアンケート結果

(3) 研修をよりよいものにするために改善すべき点があれば、具体的にお書きください。

- ・各ワークの時間がタイトであった
- ・ディスカッションの時間をもっととって欲しい
- ・ビデオ教材が長かった
- ・資料をより分かりやすくしてほしい

(4) その他、お気づきの点があればお書きください。

- ・事前課題についてもう少し早めに案内してほしい
- ・事前課題の時期が他の業務と重複しているため負担が重かった
- ・1 日だけのプログラムの方が参加しやすい

4.1.4 成果と課題

今回のアンケート結果から、「授業設計ワークショップは自分の業務に生かせる内容だった」「受講したことによって教育への取り組み方が改善されると思う」「授業設計ワークショップの目的は明確に設定されていた」「ワークショップは全体的に満足できるものだった」「反転授業用の講義ビデオの時間(長さ)は適当だった」という設問において全ての回答者から肯定的な回答が寄せられた。ほかの設問においてもほぼ全員から肯定的な回答が得られた。また自由記述からも、シラバスや授業設計に関する知識を習得できたこと、模

擬授業を通じて他の教員の実践を見たり、自身の授業実践に向けた改善点を得られたりした点について高く評価されていることがうかがえた。以上から、本ワークショップの目標として掲げられている 4 点について、参加者はおおむね達成できたと考えられる。また反転授業用の講義ビデオや事前課題についても、長さや時期において指摘されている部分はあるものの、おおむね肯定的な評価が得られていると言える。

一方で課題としては、参加者が落ち着いて理解を深める、あるいは対話することができるようワークの時間配分や内容についてさらに精査と改善を行うことが挙げられる。

以上の成果と課題を活かし、来年度に向けてより良いワークショップを計画・実施したい。

(飯尾 健)

4.2 授業実践の振り返り

4.2.1 目的

授業実践の振り返りは、日常的な授業における実践を振り返ることで、授業の設計・実施の見直し及び改善までの取り組みを支援する FD である。教育力開発コースの対象者が授業設計ワークショップの次に受講するプログラムであり、ワークショップで修得した内容を実践で活かすための機会となる。

4.2.2 授業実践の振り返りの流れ

「授業実践の振り返り」では、対象者が「授業実践の振り返りシート」に記載されたチェック項目に基づき、自身の授業実践を振り返る。振り返りの流れは次の通りである。まず、対象者が、自身が担当する授業のうち、ある1日（1回）の授業を振り返り実施日として指定し、その授業の「①シラバス」、その日の「②授業計画書」を準備する。このシラバスや授業計画書はFD業務を担う教育改革推進部門の担当者による添削指導を受け、適宜加筆修正を行うことになる。続いて、学生による「③授業評価アンケート」（指定様式）を実施し、アンケート結果を踏まえて、「④授業実践の振り返りシート」（図3）を作成する流れである。

対象者が作成した資料①～④を基に、所属部局のFD委員長が授業におけるPDCAサイクルが構築されているか否かの確認を行う。その後、全学FD委員会において、当該資料の内容について確認し、承認を得る。この承認をもって本プログラムの修了としている。

4.2.3 実施報告

2024 年度は表 3 の通り、13 名の教員が実施し、全員が全学 FD 委員会において承認を受けた。

(塩川奈々美)

4.3 授業参観・授業研究会

4.3.1 目的

授業参観・授業研究会は、教員が教員の授業の様子を参観し、授業改善に向けた研究会を行うFDである。教員それぞれの授業内容や状況に寄り添った具体的で日常的なFDを目指しており、授業の把握、授業の改善、参加者間での授業技術の共有を目的としている。

4.3.2 授業参観・授業研究会の流れ

授業参観・授業研究会では、はじめに参加者が対象教員の授業を参観する。授業の様子を撮影・録画し、学生アンケート（授業の理解度、良かった点、改善して欲しい点、先生へのメッセージを問う）を実施する。この授業参観・授業研究会は学部FDとの共催となるため、全学に案内を出すことで対象教員所属学部内外からの参観者・研究

[illegible]

図3 授業実践の振り返りシート

表 3 授業実践の振り返り修了者

| 承認日 | 学部・学科等 | 氏 名 | 授業名 | 評価者 (FD 委員) |
|-----------|------------|------------------|---|-------------|
| 6 月 11 日 | 薬学部 | 中尾 允泰 | 基礎化学 I・電子と有機化学 | 立川 正憲 |
| 7 月 9 日 | 医学部医学科 | 船本 雅文 | 薬理学 | 野間口雅子 |
| 7 月 9 日 | 歯学部 | 常松 貴明 | 病理学実習 | 日野出大輔 |
| 9 月 10 日 | 医学部医科栄養学科 | 内田 貴之 | 人体構造機能学 | 赤川 貢 |
| 9 月 10 日 | 生物資源産業学部 | 山田 晃嗣 | 植物生理学 | 櫻谷 英治 |
| 11 月 12 日 | 総合科学部 | 紺田 俊 | スポーツマーケティング論 | 豊田 哲也 |
| 11 月 12 日 | 理工学部 | 鶴見 裕之 | 微分積分学 II | 松本 健志 |
| 11 月 12 日 | 生物資源産業学部 | 阪本 鷹行 | 食品衛生学 II | 櫻谷 英治 |
| 12 月 10 日 | 薬学部 | Karanjit Sangita | Special Lecture for Writing English Articles on Pharmaceutical Sciences | 立川 正憲 |
| 12 月 10 日 | 理工学部 | 宮谷 和堯 | 複素関数論 | 松本 健志 |
| 2 月 17 日 | 理工学部 | 金井 純子 | 合意形成技法 | 松本 健志 |
| 3 月 11 日 | 総合科学部 | 石原 由貴 | 芸術工学特論 | 豊田 哲也 |
| 3 月 11 日 | 環境防災研究センター | 山中 亮一 | 沿岸域工学 | 南川 慶二 |

会参加者が集まる場合もある。授業参観にあたっては、高等教育研究センター教育改革推進部門の教員は、授業のポイントや気になる点などを記録する（授業の構成や内容、使用している教材、時間配分、特筆すべき発言や出来事など）。授業参観終了後、授業研究会を開催する（対象教員の都合により別日に実施される場合もある）。ここでは、対象教員と授業を参観した教員が、授業内容について議論を行う。録画したビデオで授業の様子を振り返りつつ、学生アンケートの結果を確認し、うまくいっている点や工夫されている点を共有するとともに、困っている点を解決するためのアイデアについて意見交換を行う。

4.3.3 実施報告

授業参観・授業研究会は教育力開発コースの STEP2 の実施方法の 1 つであるが、2024 年度における開催実績は 0 件であった。教育力開発コース STEP2 の対象者で、今年度に振り返りに取り組んだ教員は全員、4-2 で紹介した「授業実践の振り返り」を希望した形である。

書面で振り返りを行う「授業実践の振り返り」は対象者が自身のタイミングで書類を作成し、提出する形で完了するため、対象者にとって一定の取り組みやすさがある。一方で、授業参観・授業

研究会は FD 担当者や同じ分野の教員から自身の授業内容や方法について実際に見てもらった上でフィードバックを受けることができるため、そこでの議論が授業改善に結びつけやすいメリットもある。今後も継続して授業参観・授業研究会の研修制度を運用し、本学教員の授業改善の一助としたい。
(塩川奈々美)

4.4 ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ (TPWS)

4.4.1 背景

徳島大学では 2011 年度より、教育の成果や課題を整理し、教育業績を可視化するとともに、教育活動の改善につなげるため、「ティーチング・ポートフォリオ作成ワークショップ（以下、TPWS）」を開催している。2018 年度～2021 年度は、参加希望者が 2 名に達しないことや、新型コロナウイルス感染症への対応からワークショップが実施できていなかったが、2022、2023 年は 2 名以上の参加希望があり、ワークショップが開催された。しかし、再び 2024 年度は参加申込者数が 1 名であったことから TPWS を開催できていない。

一方、近年では簡易版のティーチング・ポートフォリオを開発し、普及していこうとする動きが見られる。その 1 つに、ティーチング・ポートフォ

リオ・チャート（以下、TP チャート）を挙げることができる。TP チャートは、東京大学の栗田佳代子氏、吉田壘氏によって開発されたものであり、ワークシートを活用して 2 時間程度で、具体的な実践から自身の教育に対する理念を明確にし、成果や課題、今後の目標を設定するものである¹⁾。TP チャートは、ティーチング・ポートフォリオ作成の導入段階で作成しており、2021 年度から、この TP チャートを作成する部分（90 分間）を 1 つのプログラムとして「TP チャート作成ワークショップ」を実施している。2024 年度は、TP チャート作成ワークショップの参加希望者があったことから、以下では TP チャート作成ワークショップについて述べる。

4.4.2 概要

教員が授業実践を振り返り、評価、改善を行うことを支援するために、栗田佳代子・吉田壘・大野智久（2018）『教師のためのなりた教師になれる本！』に紹介されている TP チャートを参考にして、授業実践に焦点を当てた「徳島大学版ティーチング・ポートフォリオ・チャート」を作成している（図 4、5、6）。この TP チャートの作成は、徳島大学が 2018 年度に策定している「教育の質保証に関する方針」（一般的にいうところのアセスメントポリシーにあたる）に掲げられている「科目担当教員は、それぞれの学位プログラムにおける担当科目の位置づけを理解し、意図する学習成果（到達目標）の達成状況及び、到達度を指標として自ら行う授業評価及び学生による授業評価結果に基づき、（中略）授業改善に努める」ことに関連すると位置付けている。

■開催日程

2024 年 9 月 4 日（水）

■会場

教養教育 6 号館 2 階 201 講義室

■参加者

教員 3 名

4.4.3 成果と課題

参加者アンケートから、「何気なく講義資料を作成していたけど、自分の理念を明確にすること



図 4 徳島大学版 TP チャート

ができた。学生時代に学生として受けていた授業で思ったことが理念に反映されていてよいと思った」との意見が挙げられた。また、「教育活動の振り返り」については、参加者は概ねできたと回答していたが、自己評価を行うこと、改善点を見つけることや目標設定については、十分ではなかった参加者もいた。また、ティーチング・ポートフォリオを作成したいと回答した参加者は 1 名のみであった。2023 年度は、本ワークショップを TPWS と同時に実施しており、ティーチング・ポートフォリオを作成して、教育活動を振り返るということに対して、全体的に動機づけができていた中で TP チャートの作成や参加者同士の情報共有が行われた。今回、TP チャート作成ワークショップの申込者 4 名のうち 2 名が直前に参加できなくなったことや、急きょ参加することを決めてくれた教員がいた。いずれにしても参加者数が少ないことから、断定することはできないが、2023 年度と比較して、ワークショップの成果としては期待に届かなかったと考える。

2022 年度以降、TPWS は定員に達しており開催してきたことで、今年度は積極的な広報活動ができていなかったと考える。TP チャート作成ワークショップは本学における「教育の内部質保証に関する方針等」にも関連する取組であり、過去に実施したワークショップの参加者の意見からも有意義であることが示されている。TP チャートワークショップも含め、TPWS についても、今後は広報活動をより積極的に行う必要がある。

（吉田 博）

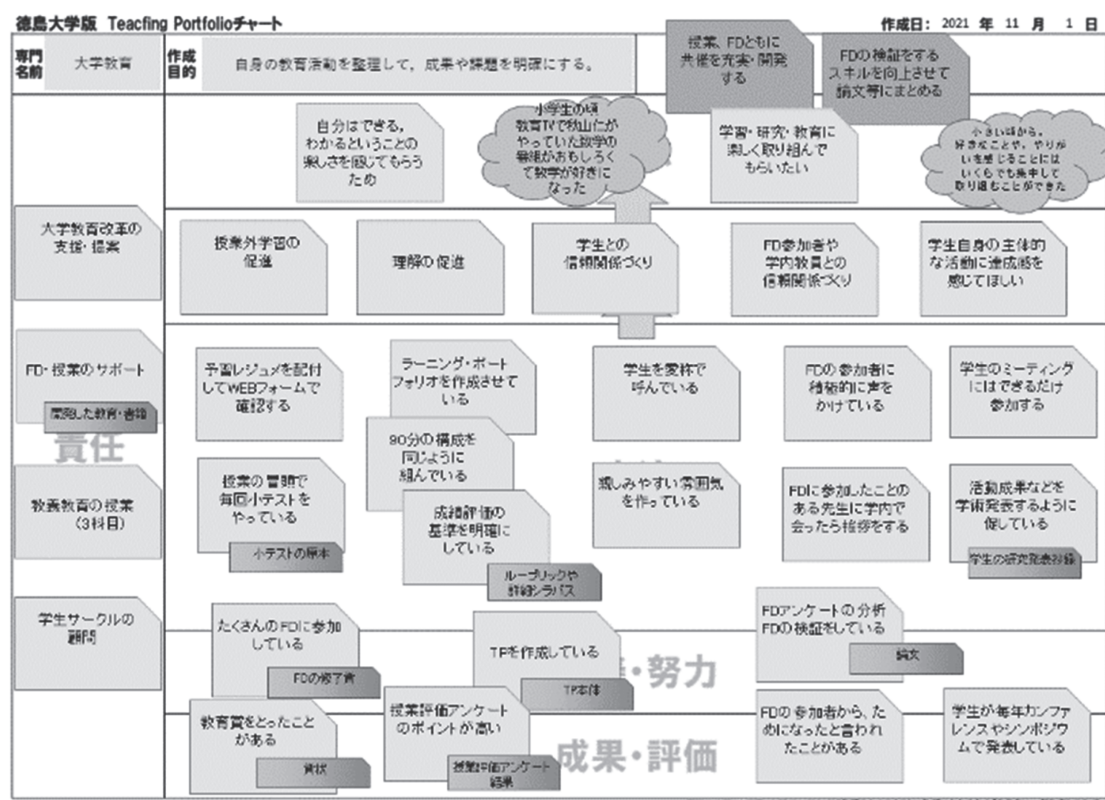


図 5 徳島大学版 TP チャート (サンプル)



図 6 TP チャート作成ワークショップの様子

5. 授業について考えるランチセミナー

5.1 目的

「授業について考えるランチセミナー」は、授業改善に関する幅広いトピックや情報を共有するために、教職員および学生を対象に様々なテーマでマイクロレベルの FD プログラムを計画的に実施するものである。また、四国地区大学教職員能力開発ネットワーク (SPOD) の FD プログラムとして、四国地区の各大学にも開放している。

本セミナーの位置づけとして、「気軽に参加で

き、かつ充実した情報を提供する」というものがある。すなわち、他の業務や研究を行いながら気軽に参加することができるとともに、教員による実践事例や学生の声を紹介するといった、授業改善に役立てられる有益な情報を提供・共有できることを目指したものである。この位置づけのもとに、今年度も引き続き、月 2 回、昼休みの 12 時 5 分から 50 分まで、同じテーマで週ごとに異なる内容のセミナーを Zoom によるオンラインで実施した (図 7)。

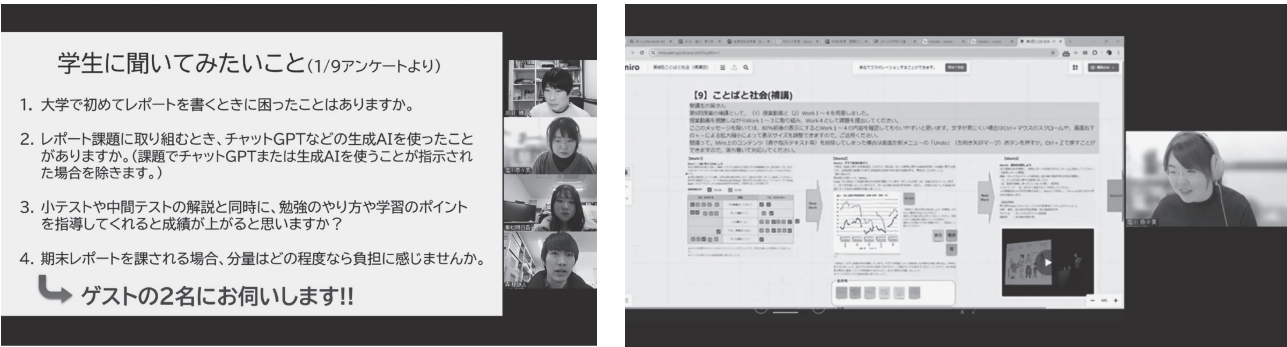


図 7 「授業について考えるランチセミナー」実施風景

今年度はこれまでの高知大学学び創造センターに加え、香川大学大学教育基盤センターも加わり、3 大学での共催という形となった。本セミナーの企画・実施は本センターの教員が実施するとともに、広報も 3 大学ならびに SPOD を通じて、四国地区の幅広い大学に広く周知を行った。

5.2 概要

表 4 に示した通り、10 のテーマで計 20 回のセミナーをオンラインで実施し、延べ 1294 名の教職員、大学院生、学部学生が参加した。

5.3 成果と課題

プログラム終了直後、参加者を対象にアンケート

トを実施し、延べ 493 名から回答を得た。アンケートの設問のうちプログラムの成果に関する 4 件法のアンケート結果は図 8 の通りである。

アンケートの結果から、「今後の授業や教育活動に活かせる情報を得ることができた」、「本セミナーは今後の教育活動において有益なものであった」をはじめ、いずれの設問でも「とても当てはまる」と「どちらかと言えば当てはまる」を合わせた肯定的な回答について 90% を超える回答率を得ることができた。

同時に自由記述での意見では、アンケート内の本セミナーに参加して良かった点・有益であった点として「テーマについて有用な情報や知見、最新の動向を知ることができた」「具体的な事例や

表 4 2024 年度「授業について考えるランチセミナー」実施状況

| | テーマ | コーディネーター | 実施日 | 参加者数 |
|----|------------------------------|------------------------|-----------|------|
| 1 | 合理的配慮の必要な学生に向けた授業づくり | 杉田 郁代 (高知大学学び創造センター) | 4 月 11 日 | 79 名 |
| | | | 4 月 18 日 | 64 名 |
| 2 | オンラインツールを活用した双方向型授業 | 塩川奈々美 (徳島大学高等教育研究センター) | 5 月 9 日 | 80 名 |
| | | | 5 月 16 日 | 67 名 |
| 3 | 収集された学生データの活用方法—教学 IR に向けて— | 飯尾 健 (徳島大学高等教育研究センター) | 6 月 13 日 | 82 名 |
| | | | 6 月 20 日 | 66 名 |
| 4 | 授業と AI の幸福な関係を考える | 高畑 貴志 (高知大学学び創造センター) | 7 月 11 日 | 70 名 |
| | | | 7 月 18 日 | 55 名 |
| 5 | 授業実践の成果を発表しよう | 塩川奈々美 (徳島大学高等教育研究センター) | 9 月 12 日 | 48 名 |
| | | | 9 月 19 日 | 51 名 |
| 6 | 学生の学習への動機づけを高める授業づくり | 吉田 博 (徳島大学高等教育研究センター) | 10 月 10 日 | 65 名 |
| | | | 10 月 17 日 | 53 名 |
| 7 | 複数の方法を組み合わせた多面的な学習評価の提案 | 飯尾 健 (徳島大学高等教育研究センター) | 11 月 14 日 | 66 名 |
| | | | 11 月 21 日 | 57 名 |
| 8 | 学生支援の動向と体制づくり—障害学生支援に焦点を当てて— | 蝶 慎一 (香川大学大学教育基盤センター) | 12 月 12 日 | 54 名 |
| | | | 12 月 19 日 | 57 名 |
| 9 | 学生の学習を促す試験問題・レポート課題の作り方 | 吉田 博 (徳島大学高等教育研究センター) | 1 月 9 日 | 74 名 |
| | | | 1 月 16 日 | 78 名 |
| 10 | 障害学生に対するキャリア支援 | 杉田 郁代 (高知大学学び創造センター) | 2 月 13 日 | 68 名 |
| | | | 2 月 20 日 | 60 名 |

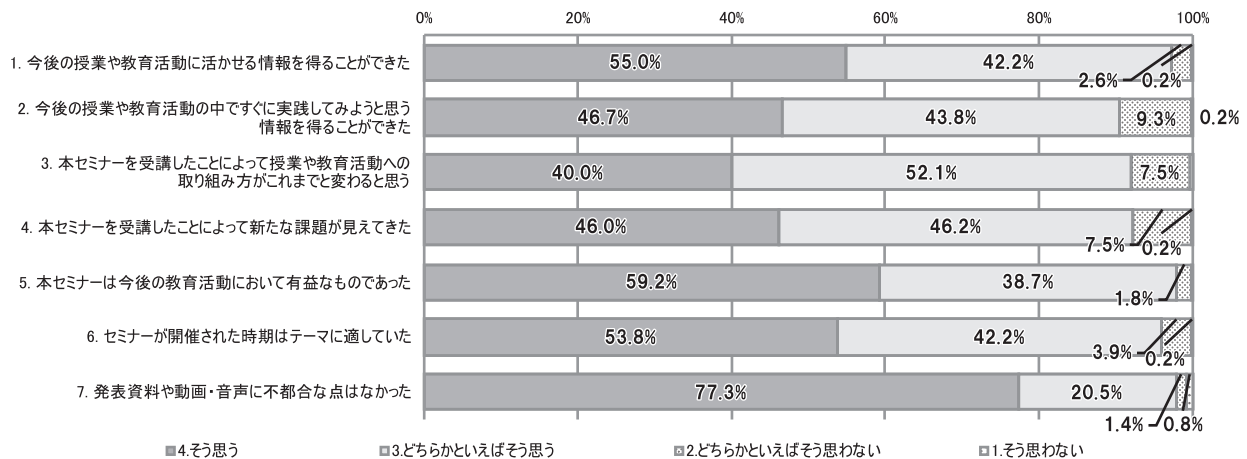


図 8 「授業について考えるランチセミナー」アンケート結果

取り組みを知ることができた」「実際の学生の声を聞くことができた」といったものが見られた。また、「気軽に参加できよい機会になった」といった声も寄せられた。これは本セミナーがオンラインで実施する利点を活かし、気軽に聴講できると同時に、有用な情報を得られるようセミナーを設計・運営していることが好意的に受け止められたことの表れと言える。加えてセミナーのテーマも教員のニーズをある程度くみ取れたものであったことも理由であろう。

また本セミナーは SPOD 開放プログラムであり、徳島大学のほか高知大学・香川大学、さらには SPOD 加盟校から多数の教員が参加した。今年度は延べ参加者のうち徳島大学からの参加者はおよそ 4 割、また高知大学からの参加者は 2 割、香川大学からの参加者は 1 割で、他の SPOD 加盟校からの参加者は 3 割であった。

来年度は教員に対してさらに有益な情報が提供できるよう、参加者のニーズに合ったテーマを選定するとともに、授業改善や大学教育に関する情報や実践事例を積極的に収集したい。

(飯尾 健)

6. SIH 道場担当者 FD

徳島大学の全学初年次教育プログラムである「SIH 道場」の授業担当者が、SIH 道場の設置背景となる大学教育再生加速プログラムの概要や自身が担当する SIH 道場の意義について理解を深め、SIH 道場の授業を担当するために必要な知識

を修得することを目的に「2024 年度 SIH 道場担当者 FD」を開催した。

SIH 道場は、本学が 2014 年度に採択された文部科学省大学改革推進等補助金事業「大学教育再生加速プログラム（テーマ I：アクティブ・ラーニング）」の取り組みとして 2015 年度から導入された全学 1 単位必修の初年次教育プログラムである。内容はそれぞれの専門分野毎に異なるため、授業設計においては、i：専門分野の早期体験、ii：ラーニングスキル（文章力・プレゼンテーション力・協働力）の修得、iii：学修の振り返りという 3つの目標を SIH 道場の共通設計項目として定め、これを盛り込んだプログラムとなるよう設計されている。

授業担当者は原則として年度ごとに交代することになっているため、補助金期間中における本 FD は毎年度実施し、義務に近い形での参加を呼びかけてきた。2020 年度より、SIH 道場のマネジメントは SIH 道場の実施単位である各学部学科等に委ねられたため、本 FD への参加も任意である。しかしながら、全学の SIH 道場の実施状況を把握し、担当者から寄せられる課題を検討、情報共有の場を設けることで、各学部学科等の担当者の疑問を解消し、SIH 道場の意義を理解したうえで着手することができるようになるという点で重要な意味合いを持つ。本節では、こうした位置づけである「2024 年度 SIH 道場担当者 FD」の実施概要を報告する。

6.1 目的

本 FD の狙いは、授業設計を担当する代表者、また SIH 道場の授業担当者が SIH 道場の概要を把握するとともに、SIH 道場で役立つ教育手法やそのツールについて学ぶ機会を提供することにある。今年度のプログラムでは、参加者に SIH 道場の理念や授業設計における必須項目について解説し、授業設計コーディネーターや授業担当者の役割を確認したほか、SIH 道場の実施を支援する高等教育研究センター教育改革推進部門、学修支援部門 EdTech 推進班の教員による課題検討会を開催し、SIH 道場の円滑な実施・運営の支援を目指した。本 FD の目標は次の 3 つである。

- ① SIH 道場授業担当者が当該学科の SIH 道場の背景やその詳細について理解し、SIH 道場の授業を担当するために必要な知識と技能を習得する。
- ② SIH 道場が OJT 型の FD であることや授業実施から振り返りまでのプロセスについて理解する。
- ③ 前年度の実施内容を情報共有し、振り返ることで、オンライン実施の可能性も含めた SIH 道場の実施を検討し、今年度実施に向けた計画の見通しをもつ。

6.2 概要

■開催日程

2024 年 1 月 26 日 (金)

■会場：オンライン (Zoom)

■参加者

今年度の参加者は、常三島キャンパスならびに蔵本キャンパスの教職員 25 名である。

■運営メンバー

運営メンバーの詳細は次の通りである (表 5)。

■内容・全体の流れ

「SIH 道場の概要」では、SIH 道場の目標、内容、実施体制、授業設計の必須項目について解説を行い、高等教育研究センター各部門による支援や提供される教材 (テキスト・動画教材など) について説明した。続いて「SIH 道場運営・実施における課題検討会」と題して、2023 年度 SIH 道場授業担当者から寄せられた SIH 道場を運営・実施していく上で考えられた要望や課題を紹介した (表 6)。挙げられた課題として、オンラインで学生参加型のプログラムを実施する方法や、対面型プログラムをオンラインに切り替えるための備え、SIH 道場の実施時期や期間の見直しについて過年度の SIH 道場授業担当者から寄せられた意見を紹介した。これらの課題に対し、SIH 道場の実施支援を担当する高等教育研究センター教育の質保証支援室の塩川奈々美助教による司会進行のもと、教育改革推進部門の吉田博准教授、飯尾健助教、学修支援部門 EdTech 推進班の金西計英教授から、挙げられた課題に対し考えられる対応策や授業実施の Tips が紹介された。

表 5 2024 年度 SIH 道場担当者 FD 担当者

| 氏 名 | 所 属 | 職 名 |
|-------|-------------------|-----|
| 吉田 博 | 教育改革推進部門 | 准教授 |
| 飯尾 健 | 教育改革推進部門 | 助 教 |
| 塩川奈々美 | 教育の質保証支援室 | 助 教 |
| 金西 計英 | 学修支援部門 EdTech 推進班 | 教 授 |

表 6 2024 年度 SIH 道場担当者 FD

| 時間 | 内 容 | 詳 細 項 目 | 担当者 |
|------|----------------------|---|-----------------------|
| 15 分 | SIH 道場の概要 | ①目的・概要 ② 2023 年度の実施事例紹介 | 塩川奈々美 |
| 40 分 | SIH 道場運営・実施における課題検討会 | 過去の実態調査において挙げられた SIH 道場運営・実施における課題点、改善点等について担当者より解説を行う。 | 吉田 博 飯尾 健 金西 計英 |
| 5 分 | 質疑応答 | | |

6.3 成果と課題

FD 終了後に研修内容に関するアンケート調査を実施した (図 9, 回収率は 94.7% ($n=19$)). アンケート回答者のうち, 参加者の職種は「教員 (SIH 道場授業担当者)」は 61%, 「教員 (授業設計コーディネーター)」は 39% であった。例年開催している本 FD への参加経験については 56% が「以前参加したことがある」と回答しており, 参加経験がある参加者が過半数であった。

SIH 道場担当者 FD について質問した結果, 「SIH 道場の目的の理解」や「SIH 道場における学生の到達目標の理解」では肯定的意見が 100% に及んだ。「2024 年度の実施に向けて SIH 道場の授業設計や授業実施に役立つ情報が得られた」「FD の全体的な満足度」に対する肯定的意見は 80% を超えた。

本 FD に関する自由記述では,

- ・昨年度の相談内容がわかった。
- ・他の部局やコースがどのような SIH 道場を行っているのかがわかったので良かった。SIH 道場はあくまでも新入生に対して, 大学での学びの導入を目的としていることを再確認できた。
- ・本コースの SIH 道場は, 新入生が教員や他の学生との関係を築きながら大学生活に慣れていくことに重きをおいて授業設計を行っています。そのため, 講義としてはあまり厳しい制限を加えないようにしています。コメンテーターの先生方から, あまり厳密にやり過ぎなくても良いという意見をお聞きして, 安心しました。

など, SIH 道場の意義や方針を再確認することができたとする声が窺えた。SIH 道場の業務に関する FD として, SIH 道場に関する情報を共有することができた。

本 FD を実施するにあたっては, 前年度にどのような形で SIH 道場を実施したのかを問う「SIH 道場の実施に関する実態調査」を実施しており, SIH 道場を実施する全ての部局からどのような体制や授業設計で SIH 道場を行ったのかに関する回答を得ている。この調査で得られた情報は FD を通じて次年度の SIH 道場授業担当者に向けて情報を共有しており, こうした情報提供も参加者にとって有益である様子がうかがえた。円滑な SIH 道場運営に向けた支援の 1 つとして, これからも本 FD を活用されたい。(塩川奈々美)

7. 大学教育カンファレンス in 徳島

7.1 目的

大学教育カンファレンス in 徳島は, 教育活動の成果を検証し, 教育実践研究を充実・発展させる機会となるよう, 本学や他の高等教育機関で行われている教育実践の先駆的な取り組みを共有し, 大学教育の質的向上に向けた努力の成果を確認することを目的としている。2005 年度から実施しており, 今回で 20 回目を迎える。また SPOD 共通事業として位置付けており, 2020 年度～2022 年度の 3 年間は, 新型コロナウイルス感染症の影響を受け, Zoom によるオンラインをメインとして実施してきた (2022 年度は一部に

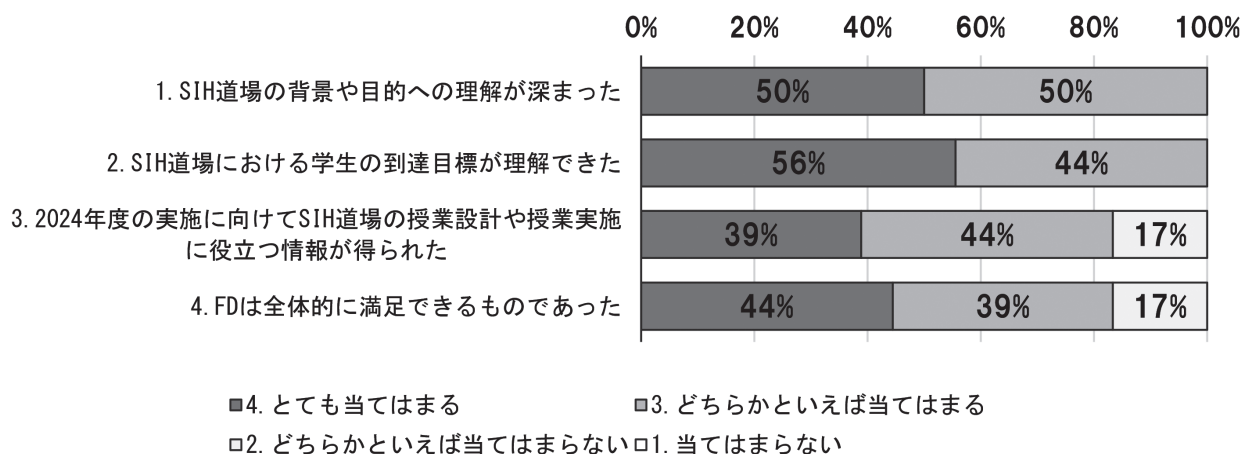


図 9 2024 年度 SIH 道場 FD アンケート結果 ($n=19$)

対面会場を設置)。2023 年度からは徳島大学常三島キャンパスの対面会場での開催をメインとし、一部のプログラムをオンラインで配信するハイブリッド形式で実施している。

7.2 概要と成果

■開催日程

2024 年 12 月 26 日 (木)

■会場

常三島キャンパス 教養教育 4 号館, 6 号館,
地域創生・国際交流会館
一部のプログラムでオンライン (Zoom) 配信

■概要

全体の参加者数は学外からの参加者 61 名を含む, 161 名であった。研究発表の件数は, 口頭発表 16 件, ポスター発表 15 件, ワークショップが 5 件であり, 特別講演が 1 件行われた (表 7)。

2024 年度も昨年度に引き続き, 対面会場での実施をメインとし, 口頭発表, 特別講演, ディスカッション, 及び発表者の希望によりワークショップ C については, オンライン配信を行うハイブリッド型で実施した。オンラインについては, 1 つのアカウント内に Zoom のブレイクアウトルーム機能を活用して, 発表会場ごとにルームを設置し, 参加者は自由にルーム間を移動できるように設定した。参加者 161 名のうち, 51 名がオンラインでの参加であった。オンライン配信の運営についても, 昨年度に引き続き, 各会場には対面会場係やオンライン担当係を設置し, 想定される対応事項について, 事前に担当者間で動作確認を行い, ハイブリッド形式でのカンファレンスの運営に備えた。

特別講演では, 東京科学大学リベラルアーツ研究教育院の岡田佐織氏による「大学における教養教育をどう考えるかー専門分野を超えた学びを実現するカリキュラム設計と組織運営ー」と題した講演が行われた。特別講演後には, 指定討論者として愛媛大学教育・学生支援機構の中井俊樹氏より, 「専門分野の知識と幅広い汎用的能力の葛藤」, 「教養教育の実質化にトップ以外の各ステイクホルダーにできること」など, 講演内容を実際の各大学における教養教育に落とし込むための 5 つの

質問が提示された。さらに徳島大学 教養教育院院長の渡部稔教授も加わり, 会場からの質問に回答するディスカッションを展開した。参加者は匿名で質問を投稿することができる Learn Wiz one を活用し, 対面会場及びオンラインから 19 件もの質問が寄せられた。ディスカッションでは東京科学大学や徳島大学の取組を振り返り, 今回の講演内容を今後の教養教育につなげていくための意見交換が行われた。

7.3 カンファレンスの成果と今後の課題

2024 年度も昨年度と同様に, すべてのプログラムを対面会場で実施し, 特別講演, 口頭発表, 一部のワークショップをオンライン配信したことで, 対面会場の参加者数が 110 名であり, またオンラインによる参加者も全国から幅広くあり, 学内外からアクセスしやすいカンファレンスになったと考える。発表件数については, 今年度は過去数年を上回っており, カンファレンスの翌日に SPOD ネットワークコア会議運営協議会を実施したことで, SPOD コア校の関係者が参加しやすく, 研究発表への動機づけにもつながったと考える。近年, 学外の教職員による研究発表やワークショップの企画も増加しており, SPOD 共通事業として広く広報していくことや, 引き続きハイブリッド形式で実施することで, 学内外の教職員の参加を働きかけていく必要がある。

カンファレンスでは, 参加者を対象にカンファレンス終了後にアンケートを実施しており, 67 名から回答を得た (回収率 42%)。カンファレンスの成果に関するアンケート結果を図 10, 11 に示している。「a. 自分に必要な知識やスキルを身につけることができた」, 「b. 参加したことによって業務の取り組み方が改善されると思う」, 「c. カンファレンスの内容を十分に理解できた」という設問について, 「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した参加者が約 90%であり, 過去 3 年間に引き続き肯定的な回答を得ている。これは研究発表の内容や特別講演のテーマ設定が参加者のニーズや興味に合致していること, 研究発表者の発表が工夫されていたこと, 特別講演のテーマや講師が魅力的であることが要因の一つに

表 7 第 20 回大学教育カンファレンス in 徳島プログラム

| | | | |
|----------------------|--|--|---|
| 9 : 00 ~ 9 : 10 | 開会挨拶：河村 保彦 学長 | | |
| 9 : 15 ~ 10 : 15 | 研究発表 I (口頭発表) | | |
| | 口頭発表 A < 4 - 202 講義室 > A① 9 : 15 ~ 9 : 35 ■自然科学系教養科目のグループワーク実施方法の検討 徳島大学 教養教育院 南川 慶二 | 口頭発表 B < 4 - 203 講義室 > B① 9 : 15 ~ 9 : 35 ■ゲーム制作における多人数マネジメントの成功と失敗 徳島大学 総合科学部 4 年 平木 竣祐 他 | 口頭発表 C < 4 - 204 講義室 > C① 9 : 15 ~ 9 : 35 ■オンラインによる徳島大学全学説明会の展開と今後の展望 徳島大学 高等教育研究センター 植野 美彦 他 |
| | A② 9 : 35 ~ 9 : 55 ■看護大学生の口腔保健行動の認識・関心と臨地実習での体験：2024 年度 4 年次学生の分析 徳島大学 大学院医歯薬学研究部 桑村 由美 | B② 9 : 35 ~ 9 : 55 ■ロボコンプロジェクトでの技術向上のための取り組み 徳島大学 理工学部 3 年 臼井 証樹 他 | C② 9 : 35 ~ 9 : 55 ■学生による討論会企画の成果と課題 徳島大学 総合科学部 2 年 東 穂香 他 |
| | A③ 9 : 55 ~ 10 : 15 ■早期体験実習における基礎臨床統合型実習の効果とカリキュラム改善にむけた取り組み 徳島大学 大学院医歯薬学研究部 西田 憲生 他 | B③ 9 : 55 ~ 10 : 15 ■滑空機パイロットの効果的な育成方法 徳島大学 理工学部 2 年 中西 彩歌 他 | |
| 10 : 30 ~ 12 : 00 | ワークショップ A <フューチャーセンター> インプロ (即興演劇) を体験してみよう！ - Give your partner a good time ! - 徳島大学名誉教授 Gehrtz 三隅 友子 他 B <地域創生国際交流会館 301 > 大学における外国人材との職場内共生を考える 東京都立大学 国際センター 黒田 史彦 他 C <教養教育 6 号館 201 > 大学教育センター等の現状把握とアイデアシェアリング - 「日本版 CTL アセスメント基準 2.0」を活用して - 徳島大学 高等教育研究センター 吉田 博 他 D <教養教育 6 号館 202 > 徳島大学 i. school 体験ワークショップ「新しい大学での学びをデザインする」 徳島大学 教養教育院 北岡 和義 他 E <教養教育 6 号館 203 > 大学教職員向けエシカル消費アクションプランの作成 名古屋女子大学 三宅 元子 他 | | |
| 13 : 00 ~ 14 : 00 | ポスター発表 < 4 - 302 講義室 > P① キャリア形成の計画段階における教育課題の抽出と解決策の検討 徳島大学 高等教育研究センター 畠 一樹 他 P② 留学生の日本企業への関心と理解：日本企業見学を通じて 徳島大学 高等教育研究センター チャン ホアンナム 他 P③ 徳島大学における補綴学実習の評価と改善 徳島大学 大学院医歯薬学研究部 谷脇 竜弥 他 P④ 学生の視点によるアカデミック・アドバイザー評価 愛媛大学 教育・学生支援機構 清水 栄子 他 P⑤ SA 活動の学びと現代社会に求められるスキル 松山東雲短期大学 現代ビジネス学科 2 年 高橋 美桜 他 P⑥ キャリア科目の学びを就職活動につなげる授業実践 松山東雲短期大学 現代ビジネス学科 遠山 敦子 P⑦ 加工技術獲得のための効率的な手法と指導方法の試み 徳島大学 高等教育研究センター 亀井 克一郎 他 | | |

| | | | | | | | | | |
|----------------------|---|--|--|---|---|--|--|--|---|
| 13 : 00 ~ 14 : 00 | <p>P ⑧ 高大接続科目「生物学」の効果の検証 徳島大学 教養教育院 渡部 稔</p> <p>P ⑨ 徳島大学学生プロジェクト卒業生追跡調査報告 2024 徳島大学 高等教育研究センター 森口 茉莉亜 他</p> <p>P ⑩ ワークショップを通じた成長—徳島大学 i. school で得た変化— 徳島大学 生物資源産業学部 3 年 氏久 菜々美 他</p> <p>P ⑪ ワークショップを活用した学生プロジェクトのコミュニケーション支援 徳島大学 高等教育研究センター 玉有 朋子 他</p> <p>P ⑫ 四国の災害伝承のためのカルタづくりについて 徳島大学 理工学部 4 年 岡本 創 他</p> <p>P ⑬ 音声生成・音声認識 AI を用いた UI / UX デザイン教材の開発 徳島大学 技術支援部 辻 明典</p> <p>P ⑭ 徳島大学大学院博士課程の定員充足に関する動向と課題 徳島大学 高等教育研究センター 塩川 奈々美 他</p> <p>P ⑮ 防災サークル「てくと」をはじめとする学生の防災活動 徳島大学 理工学部 1 年 小山 司 他</p> | | | | | | | | |
| 14 : 15 ~ 15 : 35 | <div>研究発表Ⅱ（口頭発表）</div> <table><tr><td><div>口頭発表 D</div><div>< 4 - 202 講義室 ></div><p>D ① 14 : 15 ~ 14 : 35 ■短大生の科学リテラシー ～概数・概寸の認識～ 香川短期大学 生活文化学科 織田 潤二</p></td><td><div>口頭発表 E</div><div>< 4 - 203 講義室 ></div><p>E ① 14 : 15 ~ 14 : 35 ■企業社員と学生の双方の成長を促す共創教育の実践 徳島大学 人と地域共創センター 川崎 修良</p></td></tr><tr><td><p>D ② 14 : 35 ~ 14 : 55 ■愛媛大学版プレ FD 科目「教授法入門」の実践と展望 愛媛大学 教育・学生支援機構 上月 翔太</p></td><td><p>E ② 14 : 35 ~ 14 : 55 ■エコランプロジェクト 鈴鹿大会完走までの車体製作の軌跡 徳島大学 理工学部 3 年 山本 悠人</p></td></tr><tr><td><p>D ③ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■非言語コミュニケーションを重視した医学部臨床実習の試み 香川大学 医学部 山本 健太 他</p></td><td><p>E ③ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■鳥人間プロジェクトの成長について 徳島大学 理工学部 4 年 菱田 椋</p></td></tr><tr><td><p>D ④ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■知ブラ e における 10 年間の学習者数変動の分析 徳島大学 高等教育研究センター 田巻 公貴 他</p></td><td><p>E ④ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■徳島大学 i. school における学生ディスカッションパートナーとしての学びと成長について 徳島大学 生物資源産業学部 3 年 西田 大連 他</p></td></tr></table> | <div>口頭発表 D</div> <div>< 4 - 202 講義室 ></div> <p>D ① 14 : 15 ~ 14 : 35 ■短大生の科学リテラシー ～概数・概寸の認識～ 香川短期大学 生活文化学科 織田 潤二</p> | <div>口頭発表 E</div> <div>< 4 - 203 講義室 ></div> <p>E ① 14 : 15 ~ 14 : 35 ■企業社員と学生の双方の成長を促す共創教育の実践 徳島大学 人と地域共創センター 川崎 修良</p> | <p>D ② 14 : 35 ~ 14 : 55 ■愛媛大学版プレ FD 科目「教授法入門」の実践と展望 愛媛大学 教育・学生支援機構 上月 翔太</p> | <p>E ② 14 : 35 ~ 14 : 55 ■エコランプロジェクト 鈴鹿大会完走までの車体製作の軌跡 徳島大学 理工学部 3 年 山本 悠人</p> | <p>D ③ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■非言語コミュニケーションを重視した医学部臨床実習の試み 香川大学 医学部 山本 健太 他</p> | <p>E ③ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■鳥人間プロジェクトの成長について 徳島大学 理工学部 4 年 菱田 椋</p> | <p>D ④ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■知ブラ e における 10 年間の学習者数変動の分析 徳島大学 高等教育研究センター 田巻 公貴 他</p> | <p>E ④ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■徳島大学 i. school における学生ディスカッションパートナーとしての学びと成長について 徳島大学 生物資源産業学部 3 年 西田 大連 他</p> |
| | <div>口頭発表 D</div> <div>< 4 - 202 講義室 ></div> <p>D ① 14 : 15 ~ 14 : 35 ■短大生の科学リテラシー ～概数・概寸の認識～ 香川短期大学 生活文化学科 織田 潤二</p> | <div>口頭発表 E</div> <div>< 4 - 203 講義室 ></div> <p>E ① 14 : 15 ~ 14 : 35 ■企業社員と学生の双方の成長を促す共創教育の実践 徳島大学 人と地域共創センター 川崎 修良</p> | | | | | | | |
| | <p>D ② 14 : 35 ~ 14 : 55 ■愛媛大学版プレ FD 科目「教授法入門」の実践と展望 愛媛大学 教育・学生支援機構 上月 翔太</p> | <p>E ② 14 : 35 ~ 14 : 55 ■エコランプロジェクト 鈴鹿大会完走までの車体製作の軌跡 徳島大学 理工学部 3 年 山本 悠人</p> | | | | | | | |
| | <p>D ③ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■非言語コミュニケーションを重視した医学部臨床実習の試み 香川大学 医学部 山本 健太 他</p> | <p>E ③ 14 : 55 ~ 15 : 15 ■鳥人間プロジェクトの成長について 徳島大学 理工学部 4 年 菱田 椋</p> | | | | | | | |
| | <p>D ④ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■知ブラ e における 10 年間の学習者数変動の分析 徳島大学 高等教育研究センター 田巻 公貴 他</p> | <p>E ④ 15 : 15 ~ 15 : 35 ■徳島大学 i. school における学生ディスカッションパートナーとしての学びと成長について 徳島大学 生物資源産業学部 3 年 西田 大連 他</p> | | | | | | | |
| 15 : 50 ~ 17 : 50 | <div>特別講演 < 4 - 202 講義室 ></div> <p>演題：「大学における教養教育をどう考えるか —専門分野を超えた学びを実現するカリキュラム設計と組織運営—」 講師：岡田 佐織（東京科学大学 リベラルアーツ研究教育院 准教授）</p> | | | | | | | | |
| | <div>ディスカッション</div> <p>テーマ：「現代の大学における教養教育の展望」 指定討論者：中井 俊樹（愛媛大学 教育・学生支援機構 教育企画室 教授） コメンテーター：岡田 佐織（東京科学大学 リベラルアーツ研究教育院 准教授） 渡部 稔（徳島大学 教養教育院 院長 教授）</p> | | | | | | | | |
| 18 : 20 ~ | <div>情報交換会 < 徳島大学 常三島キャンパス 生協食堂 Kirara ></div> | | | | | | | | |

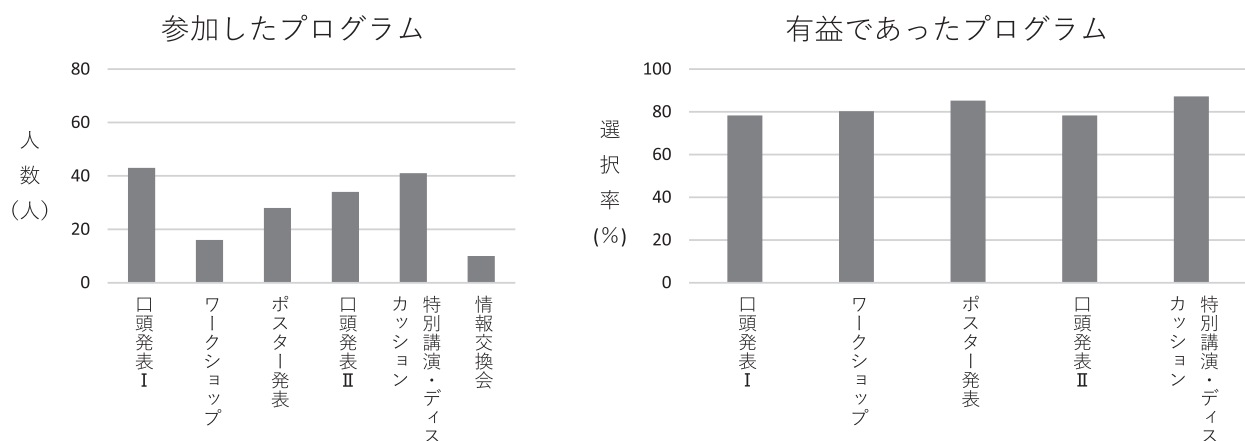


図 10 大学教育カンファレンスで参加したプログラムについて

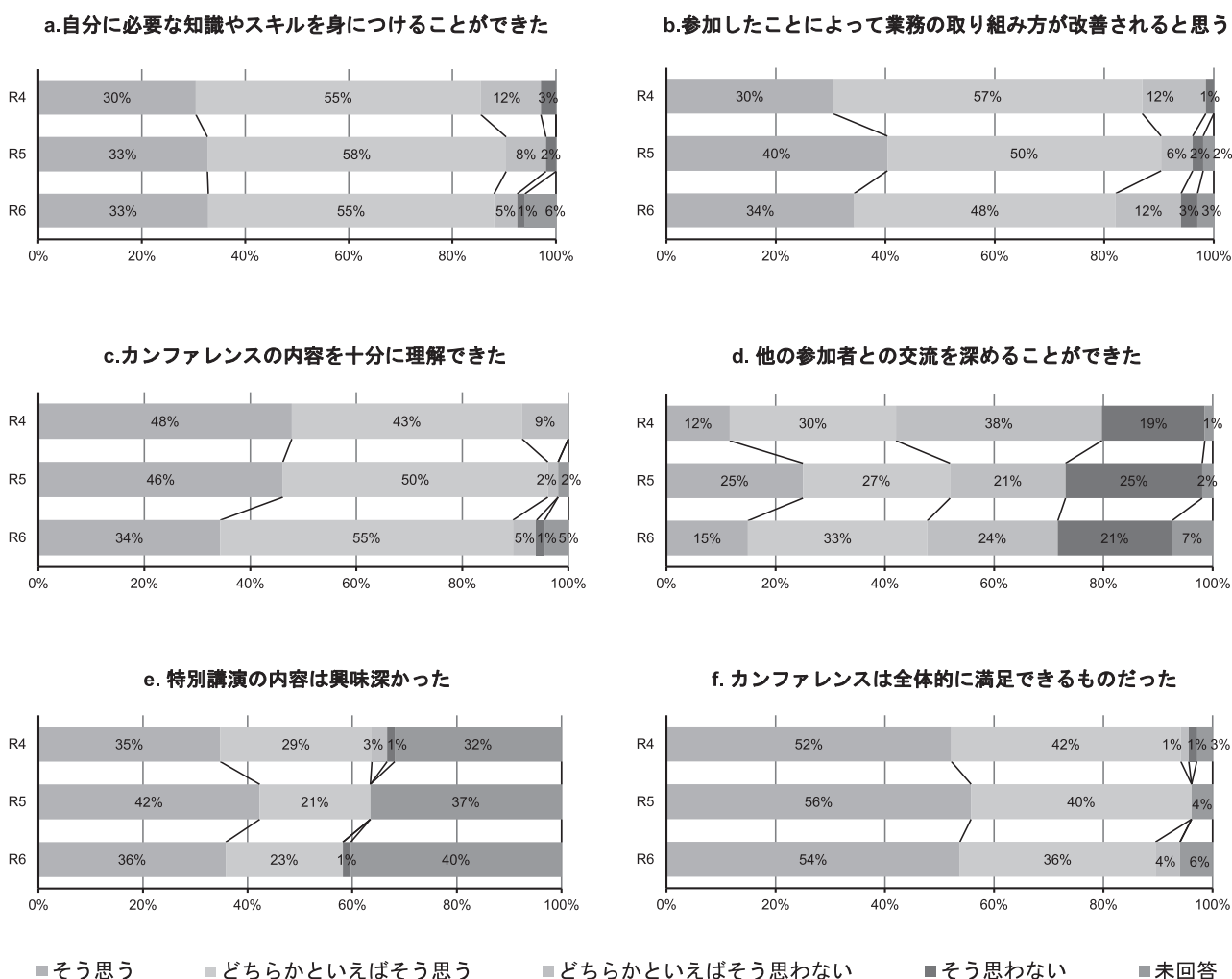


図 11 大学教育カンファレンスアンケート結果（過去 3 か年分）

あると考える。魅力的な研究発表の投稿につなげるためにも引き続きカンファレンスのプレゼンスを高める努力をしていくことが必要である。「d. 他の参加者との交流を深めることができた」では、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」と回答した参加者は昨年度から減少し、オンラインをメインとして実施した 2022 年度と同様の結果となった。この要因として、この設問について、対面のみで参加した回答者だけで見ると約 75% が肯定的な回答をしており、オンラインで参加した回答者は約 84% が否定的な回答をしていた。このことから、対面で参加した参加者同士では、他の参加者との意見交換などを通して交流を深めることができているが、オンラインでは参加者同士の交流を行うことが困難であることが分かる。

図 10「有益であったプログラムをすべて選択してください（複数選択）」では、すべてのプログラムで選択率が 80% 以上であることから、参加者にとって有益な内容を提供できていたと推察できる。「e. 特別講演の内容は興味深かった」という設問においても、参加した回答者（未回答を除く）のほとんどが、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答しており、自由記述では「東工大の教養教育には興味を持っていて、カリキュラム作成の経緯や具体的なことについて中の人の話を聞いたことは非常に有益だった」、「東京科学大学の取組については非常に興味深く感じられた。理系中心の徳島大学として何を学ぶかを考えるべきと思われる」との意見があり、今後の教養教育について参考となる示唆が与えられたことや、各大学において今後の取組を考える機会となったことが分かる。また、「東京科学大学と、本学を含む四国の大学とでは環境等が違いすぎ、実際の本学の教育や授業運営の改善にすぐに役に立つかと言えば、少々疑問です」との意見も 1 つあり、特に今回の講演を踏まえて各大学が現実を踏まえつつどのような教養教育に取り組んでいくべきかを考えていくことが難しく、かつ重要なことであるといえる。東京科学大学でも簡単に現状の取組や仕組みを整えたわけではないことが講演でも報告されていたが、この答えは当事者同士で議論して見出していくべきことだということもイ

ンプリケーションとして読み取れる。

一方で、課題としては、複数の参加者が指摘する点や大きなトラブルになった意見は挙げられていなかったが、自由記述からは、オンライン配信におけるトラブルや機器の性能による意見が挙げられている。この点は、今回の反省を活かして事前の確認や予備の体制などをあらかじめ整えておく必要があると感じる。その他には、発表の質の問題、カンファレンスの開催時期、ディスカッションや発表の進行に関する意見が挙げられた。発表の質について、上述のように多様な参加者、発表があるという面もよい点として挙げられており、現状の発表者数がキャパを超えているわけではないことから、まだ発表を厳選する段階ではないと考える。実施時期についても、SPOD フォーラムとの兼ね合いや授業が学会シーズンとの兼ね合いも踏まえて時期を検討していく必要がある。最後に進行については、各座長、司会が各所で時間を意識した運営ができるようにする必要があり、今回挙げられた意見を次年度以降の企画において活かしていきたい。（吉田 博）

8. 大学院生のための社会で役立つ教育・指導スキル育成講座

8.1 目的・背景

大学院博士（後期）課程の学生は、修了後に大学教員となる場合や、大学教員とならない場合であっても、将来的に身につけた高度な専門知識や技術を他者へ教授する機会が生じる可能性が高い。また、大学院生としての日常においても、研究室で修士課程の学生や卒業研究生に対する指導的立場になることや、ティーチング・アシスタント（TA）やリサーチ・アシスタント（RA）として教員と共に後輩の学習指導に当たる機会もある。このような状況から、大学院設置基準が一部改正され、2019 年度より博士（後期）課程の学生に対するプレ FD の実施又は情報提供が努力義務とされた。

徳島大学全学 FD 推進プログラムでは、2020 年度より、大学で教育に携わる博士（後期）課程の大学院生を対象にプレ FD プログラムを実施している。2024 年度は、ティーチング・ポートフォ

リオ・チャート（以下、TP チャート）を活用して教育活動を振り返る「日常の教育活動に関する振り返りと今後の目標設定」を実施した。

みの中で実施することを検討している。また他の組織が実施しているプログラムとも連携して、本学のプレFDを計画していく必要がある。

(吉田 博)

8.2 概要

■開催日程

2024 年 9 月 4 日（水）

■会場

教養教育 6 号館 2 階 201 講義室

■参加者

学生 2 名

■内容

日常の教育活動を振り返り、具体的な取り組みから自身の教育に対する理念を明確にし、成果や課題、今後の目標を設定するための、TP チャートを作成する。TP チャートを作成することで、これまでの教育実践を整理することができ、これからの教育活動や将来に向けた具体的な方針や行動を明確にする。なお、同時刻に実施する、教員を対象とした TP チャート作成ワークショップと合同開催した。

参考文献

- 1) 栗田佳代子・吉田 壘・大野智久 (2018) 『教師のためのなりたい教師になれる本!』, 学陽書房.

8.3 成果と今後の課題

これまで徳島大学では、大学院生向けの FD プログラムとして、2018 年度に「TA を対象にした授業支援研修会」を実施し、2019 年度からは「すぐ使える 90 分セミナー（現在、授業について考えるランチセミナー）」を大学院生も対象に加えて実施している。2020 年度からは、徳島大学全学 FD 推進プログラムにおいてプレ FD プログラムを実施し、2024 年度は実施 5 年目にあたる。

プレ FD プログラムの参加者数は、2020 年度は 6 名、2021 年度は 4 名、2022 年度は 0 名、2023 年度は 1 名であり、2024 年度は 2 名であった。今回、参加者アンケートから、「教育活動の振り返り」ができ、自己評価や目標設定に繋がったことが窺えた。ただ、徳島大学では、博士後期課程の大学院生が修了後に大学等の高等教育機関で教員となるケースは少なく、プレ FD プログラムとしての大学院生のニーズを十分に把握できていない。2025 年度からは、指導補助者研修も全学 FD 推進プログラムに取り込み、プレ FD と同じ枠組